

日蓮大聖人御書全集

こうのあまごぜんごしよ

国府尼御前御書

新版
1754
ゝ
1756

ここのあまごぜんごしよ

国府尼御前御書

けんじがんねん

がつにち

さいここのあま

建治元年('75)

6月16日

54歳 国府尼

ひとえいちりよう

さどのくに

かいのくにはきいのごう

うちしんざん

おく

単衣一領、佐渡国より甲斐国波木井郷の内の深山まで送

たそうら お

り給び候了わんぬ。

ほけきようだいし

ほっしほん

い

ひとあ

ぶつどう

もと

法華経第四の法師品に云わく「人有つて仏道を求めて、

いっこう

なか

がつしよう

わ

まえ

あ

むすう

げ

一劫の中において、合掌し我が前に在つて、無数の偈をも

ほ

さんぶつ

ゆえ

むりよう

くどく

え

つて讃めば、この讃仏によるが故に、無量の功德を得ん。

じきようしや

たんみ

ふく

かれ

す

とううんぬん

持経者を歎美せば、その福はまた彼に過ぎん」等云々。

もん

こころ

しやくそん

ほとけ

さんごうそうおう

いっちゆうこう

あいだ

文の心は、釈尊ほどの仏を三業相応して一中劫が間

懇

くよう たてまつ

まつたいあくせ よ ほけきよう

ねんごろに供養し 奉るよりも、末代悪世の世に法華經の

ぎようじや くよう くどく 勝 説 そうろう 実

行者を供養せん功德はすぐれたりとかれて候。まこと

そうら ほとけ きんげん そうら うたが

しからぬことにては候えども、仏の金言にて候えば疑

うえ みようらくだいし もう ひと きようもん

うべきにあらず。その上、妙樂大師と申す人、この經文を

かさ 和 い きぼう もの こうべしちぶん わ

重ねてやわらげて云わく「もし毀謗せん者は頭七分に破れ、

くよう もの ふくじゅうごう す どううんぬん しゃく こころ

もし供養せん者は福十号に過ぎん」等云々。釈の心は、

まつだい ほけきよう ぎようじや くよう じゅうごうぐそく

末代の法華經の行者を供養するは、十号具足します

によらい くよう 奉 くどく 過 じよくせ

如来を供養したてまつるにもその功德すぎたり、また、濁世

ほけきよう ぎようじや るなん ひとびと こうべしちぶん

に法華經の行者のあらんを留難をなさん人々は、頭七分

破

うんぬん

にわるべしと云々。

そ

にちれん

にほんだいいち

似非もの

ゆえ

てんじんしちだい

夫れ、日蓮は日本第一のえせ者なり。その故は、天神七代

ちじんごだい

計

難

にんのうはじ

はさておきぬ、地神五代またはかりがたし。人王始まつて

じんむ

とうぎん

くじゆうだい

きんめい

しちひやくよねん

あいだ

せけん

神武より当今まで九十代、欽明より七百余年が間、世間に

付

ぶつぼう

寄

にちれん

ひと

怨

つけ仏法によせても、日蓮ほどあまねく人にあだまれたる

ものそうら

もりや

じとう

焼

きよもりにゆうどう

とうだいじ

者候わず。守屋が寺塔をやきし、清盛入道が東大寺・

こうふくじ

うしな

かれ

いちるい

から

憎

まさかど

さだ 任

興福寺を失いし、彼らが一類は彼がにくまず。将門・貞とう

ちようてき

でんぎようだいし

しちじ

怨

かれ

が朝敵となりし、伝教大師の七寺にあだまれし、彼らも

にほんいつしゆう

びく

びくに

うばそく

うばい

ししゆう

いまだ日本一州の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆に

憎

はにくまれず。日蓮は、父母・兄弟、師匠・同法、上一人下

ばんみん

いちにん

漏

ふぼ

敵

むほん

ごうとう

万民、一人ももれず、父母のかたきのごとく、謀反・強盗に

勝

ひと

怨

もすぐれて、人ごとにあだをなすなり。

とき

すうひやくにん

罵

とき

すうせん にん

取

されば、ある時は数百人にのられ、ある時は数千人にと

籠

とうじよう

だいなん

遭

ところ

追

くに

い

りこめられて刀杖の大難にあう。所をおわれ、国を出だ

けつく

こくしゆ

ごかんきにど

いちど

いずのくに

こんど

さる。結句は国主より御勘気二度。一度は伊豆国、今度は

さど

しま

しんみよう

続

糧

佐渡の島なり。されば、身命をつぐべきかつてもなし。

ぎようたい

かく

ふじ

ころも

持

ほっかい

しま

放

形体を隠すべき藤の衣ももたず。北海の島にはなたれし

か

くに

どうぞく

そうしゆう

なんによ

怨

かば、彼の国の道俗は相州の男女よりもあだをなしき。

のなか 捨

ゆき 膚

交

草

摘

いのち

野中にすてられて、雪にはだえをまじえ、くさをつみて命

支

かれ

そぶ

ここく

じゅうくねんゆき

く

よ

をささえたりき。彼の蘇武が胡国に十九年雪を食つて世を

渡

りりよう

ほっかい

ろっかねん

巖

窟

責

われ

わたりし、李陵が北海に六箇年がんくつにせめられし、我は

み

知

わ

み

とが

にほん

身にてしられぬ。これはひとえに、我が身には失なし、日本

こく

助

思

故

国をたすけんとおもいしゆえなり。

あま 御 前

にゅうどうどの

か

くに

あ

とき

しかるに、尼ごぜんならびに入道殿は、彼の国に有る時

ひと目

恐

よなか

じき

送

とき

くに

責

は、人めをおそれて夜中に食をおくり、ある時は国のせめ

憚

み

代

ひとびと

をもはばかり、身にもかわらんとせし人々なり。されば、

辛

くに

剃

髪

後

引

つらかりし国なれども、そりたるかみをうしろへひかれ、

進 足 返 縁

すすむあしもかえりしぞかし。いかなる過去のえんにてや

覚 東

ありけんとおぼつかなかりしに、またいつしかこれまでさ

だいじ

我

おとこ

おん

使

遣

そうろう

しも大事なるわが夫を御つかいにてつかわされて候。

夢

幻

あま

おん

姿

見

ゆめか、まぼろしか。尼ごぜんの御すがたをばみまいらせ

そうら

こころ

覚

そうら

候わねども、心をばこれにとこそおぼえ候え。

にちれん

恋

つね

い

ひ

夕

出

つき

日蓮こいしくおわせば、常に出ずる日、ゆうべにいずる月

拝

たま

にちがつ

影

浮

み

をおがませ給え。いつとなく日月にかけをうかぶる身なり。

ごしよう

りようぜんじようど

詣

会

また後生には、靈山浄土にまいりあいまいらせん。

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

ろくがつじゅうろくにち

六月十六日

佐 渡 くに 国 府 あまごぜん

さどの国のこうの尼御前

あぶつごぼうのあま 御 前

銭 さんびやくもん

どうしん

阿仏御房尼ごぜんより、ぜに三百文。

同心なれば、こ

ふみ ふたり ひと 読

聞

の文を二人して人によませてきこしめせ。

にちれん

日蓮

かおう

花押